≪羞恥≫の構造（下）
—≪羞恥≫心の行方——

寺　沢　正　晴

＜注記＞
本稿は，『一橋研究』第十巻第三号に掲載された，『≪羞恥≫の構造（上）—「恥の文化」三考—』の続稿である。前稿においては，「恥」と「羞恥」に関する主要な見解をレヴューし，それを，＜含羞＞—≪羞恥≫—＜恥辱＞の構造として，筆者なりに再構成した。

四　明治知識人の＜恥辱＞——夏目漱石をめぐって

夏目漱石[(1)]が，維新前夜，慶応三年（1867）に誕生し，明治末年から大正初年へとかけて，言い換えれば，今世紀初頭において，短期間ではあるが，きわめて充実した作家的生涯を送ったことは，象徴的である。人間漱石が，そこに生き苦闘した，時代の趨勢を，一瞥しておくことにしよう。

江戸幕府の下，日本は，西欧列強の圧力に屈し，開国と不平等条約の締結を余儀なくされた。それを契機に，幕府権力は，根底から動揺し，幕藩体制の矛盾が噴出した。そして，明治維新。日本は，徳川封建制から，天皇制近代国家へと変革される。明治新政府は，〝富国強兵〟を目標に，近代西欧の技術・制度を採用し，日本を近代化して行った。近代的な官僚・軍事組織を編成し，中央集権統一国家を形成した。そして，封建的諸制度を改革し，殖産興業策により，近代産業を保護育成して行く。政府の開明策に呼応して，啓蒙主義運動が展開され，西欧的な風俗・習慣，思想も，大量に移入された。時代は，「文明開化」の風潮が支配したのである。

こうして出発した近代天皇制国家は，明治中期に至り，体制の基礎構築を完了した。政府は，士族反乱と自由民権運動を制圧，中央・地方の国家機構を創設・整備し，明治二二年（1889），大日本帝国憲法を制定，翌二三年，議会を開設するとともに，儒教と国家神道を基礎とし，忠君愛国思想へと収斂する，教

育勅語を発布，これを，国民教化の聖典とした。産業と資本主義経済は，明治十年代半ば，その基礎を固め，以後，対外戦争と産業革命により，急速に発達して行く。国際関係は，西欧諸国との条約改正を試み，それに一部成功する一方，朝鮮・満州支配をめぐり，清国・ロシアと対立，それとの戦争に，勝利を収めた。文化的には，教育と新聞・出版業の発達により，知識人層が形成され，国力の伸展と欧化主義への反動から，国粋保存主義・国家主義が台頭し，封建社会の解体と民権運動の挫折から，浪漫主義・個人主義が提唱されていたのである。

日清・日露戦争に勝利した日本国家は，国際的地位を高め，明治末年に至り，韓国を統合するとともに，西欧諸国との条約改正を完了した。この間，産業・交通・貿易は発展し，都市と資本主義は，急激に発展して行った。それにしたがい，中小資本家・地主，知識人，都市中間層が成長する。そして，彼らは，藩閥専制勢力に対し，立憲政治・政党政治の市民的要求を掲げ，それを，広汎な民衆運動へと展開させて行く。日本人の学問研究は，独創的・世界的研究が達成されるまでに成長し，文壇においては，自己の内面描写を主題とする自然主義が勃興，その主流を占めるに至ったのである。

こうして，漱石が成長・対峙した，明治から大正へという時代は，西欧近代文明の摂取による，日本の急激な近代化の過程である。それは，産業・交通の発展と，都市と資本主義経済発展の過程であり，それを基盤とした，民主政治成立への過程，西欧列強との対等関係樹立の過程である。そして，社会的・思想的には，近代市民社会と個人主義の成立への過程，とすることができるであろう。

*

その作品から抽出される，夏目漱石の性格特性は，第一に，生と倫理への強烈な意志である。その傾向は，『それから』以降『明暗』へと至る，大部な長編による，〝我執〟の主題の，執拗な追求に，最も端的に現われている。また，それは，現実と他者に対する嫌悪感へと反転し，『吾輩は猫である』・「野分」・「二百十日」等の初期作品における，痛烈な文明批評として表現されている。これが，漱石における，「自己肯定性」である。

漱石の第二の特徴は，生と他者に対する不安と恐怖，すなわち，「自己否定恐怖」である。その原型は，「夢十夜」の中の，いくつかの夢として記述され，

また，〝立退場〟を求める，他者と現実からの逃避性向に転化し，様々な形式において現象する。漢詩・俳句・南画等への東洋趣味，「幻影の盾」・「薤露行」等，西洋中世のロマンと幻想への浮遊，『草枕』における，〝非人情〟の世界への低徊，という形式において。あるいは，『坊ちゃん』の痛快譚，長編小説に並行して発表された，「思い出す事など」・『硝子戸の中』等の小品・エッセーにおける，過去の回想や小世界への自閉，という形式において。

そして，漱石の，自己意識の尖鋭性と，他者に対する敏感性は，しばしば記述される，鏡や探偵に対する興味に，端的にうかがわれ，また，彼に似た作中の人物，苦沙弥（猫）・長野一郎（行人）・健三（道草）等々に形象化されている。

これら諸特性の交錯・複合により，ある時には，謹厳で，苦渋に満ちた，暗い表情が，ある時は，温和で，慈愛に溢れた微笑が，彼の顔に浮ぶのである。

夏日漱石に，このような性格と文学を成立させた，決定的な体験は，言うまでもなく，ロンドン留学中に経験した，それである。

「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも関らず，文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし，斯の如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも，あながちに悔ゆることなかるべしと」（文学論）。英文学専攻を決意した漱石は，勅語発布の明治二三年（1890），帝国大学文科大学英文学科に入学した。彼は，直ちに，文部省貸費生に，翌年，特待生に選抜された。また，外人教師のために「方丈記」を英訳し，称讃される等，その学業成績は，抜群であったと云う。そして，熊本第五高等学校在職中，文部省派遣第一回留学生に推挙された。明治三三年（1900）のことである。他者の眼に映じた漱石像は，優秀な英文学者として，前途洋々たるものであったに違いない。そうして，当時，〝他人本位〟の観念を抱き，〝一寸生意気になりたがるもの〟であったという彼が，それに〝誇りと満足〟を感じ，自己を，価値者として意識していたと推測してみても，それほど，不当ではあるまい。しかし，彼には，それと相反する感覚が，英文学専攻以来，継続していた。〝何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念〟と，それに由来する，自己不確実感である。「私はこの世に生れた以上何かしなければならん，といって何をして好いか少しも見当が付かない」（私の個人主義）。

そして，漱石は，ロンドンにおいて，明確に認識した。「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざるべからず」（文学論），「学問をやるならコスモポリタンのものに限り候英文学なんかは椽の下の力持日本へ帰っても英吉利に居ってもあたまの上る瀬は無之候」（寺田寅彦宛書簡）。漱石は，異文化を体験し，英文学と漢文学の差異を，文学・文化の特殊性を認識した。それは，彼にとって，生涯を託した英文学研究の無価値を，さらには，自己自身の無価値を意味したのである。こうして，漱石は，非価値者としての自己を意識し，彼の自己意識を，動揺・尖鋭化させた。すなわち，＜恥辱＞を体験したのである。(2) その動揺を昂進させる要因として，異郷における孤独と困窮，期待にそわない妻の処遇，猛烈な読書・勉強を指摘しておかねばなるまい。漱石は，〝神経衰弱と狂気〟に陥ったのである。

しかし，漱石の自己肯定性は，その体験克服の道，自己意識再構築の道を模索した。「私はそれから文芸に対する自己の立脚地を堅めるため，堅めるためというより新しく建設するために，文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいうと，自己本位という四字をようやく考えて，その自己本位を立証するために，科学的な研究やら哲学的の思索に耽り出したのであります。……自白すれば私はその四字から出立したのであります」（私の個人主義）。以後，漱石は，この「自己本位」の理念確立のために，その生涯を，苦闘の中に送ったのである。

帰国後，明治三七年（1904），〝神経衰弱〟緩和のために執筆した『猫』，それと並行して発表された，『漾虚集』・『鶉籠』の諸短編の好評により，漱石は，朝日新聞に招聘される。彼は，一高・帝大教師の職を辞し，以後，作家活動に専念した。絢爛たる文章で，自己の主観的倫理を形象化した(3)『虞美人草』，それと対照的に，客観的事実を，冷静に写実した『坑夫』。その二つの要素を統合して，近代日本の客観的現実に直面し，そこにおける主観的理念の構築を志向したのが，『三四郎』以下の長編である。しかし，漱石は，『三四郎』においては，いまだ，自己と現実日本の課題に到達していない。母の手紙の届く〝明治十五年以前〟の世界，広田先生達の〝苔の生えた煉瓦造り〟の世界，そして，美禰子のいる〝燦として春の如くに盪いている〟世界，三四郎は，三つの世界を彷徨し，つぶやく，「迷える羊（ストレイ・シープ）」。

漱石が，時代と自己の課題を，明確に探り当てたのは，『それから』におい

てである。定職にもつかず，ぶらぶらと思索に日を送る，主人公代助は，〝義侠心〟のために以前その仲をとりもった，友人平岡の妻三千代を恋慕した。代助は，その恋故に，家族・友人と背馳し，彼らから，〝実社会〟へと追放される。彼は，現実との直面を余儀なくされ，〝ちょっと職業を捜しに〟表へ飛び出し，災暑の中，眩惑に陥った。〝義〟という，前時代的・意志的な倫理により，現実社会から超越的に生きて来た，明治の知識人，漱石と代助は，自己の内的自然—感情への屈服と，現実社会への屈服という，二つの＜恥辱＞を体験した。漱石は，それから，新たな倫理，「自己本位」の理念を，再構成しなければならぬことになったのである。

続く『門』においては，漱石の逃避傾向が，前面に現われた。友人安井の恋人お米との結婚により社会から放逐された，宗助夫婦の，倦怠を忍ばせながらも，つましく，むつまじい日常生活が，淡々と描写される。宗助は，禅寺の山門を叩き，安井との邂逅と，罪意識との直面を回避しようとした。前者には成功するが，宗教による救済は，宗助にも，衰弱した漱石にも，不可能なことであった。彼らは，〝門を通る人〟ではなく，「門の下に立ちすくんで，日の暮れるのを待つべき不幸な人であった」からである。

『門』脱稿後，漱石は，胃潰瘍を悪化させ，生死の境を往還した。いわゆる〝修善寺の大患〟である。そして，翌年には，胃病を再発させ，[4] 末娘雛子を急死させている。『三四郎』『それから』『門』の〝前記三部作〟が，「自己本位」の，他者と社会に対する罪悪を主題としているのに対し，病気回復後の〝後期三部作〟，『彼岸過迄』『行人』『心』においては，「自己本位」の，自己に対する悪と，それ故の，愛の不可能性が，主題化されているように思われる。

〝嫉妬〟を主題とした『彼岸過迄』の後，大作『行人』が執筆された。神経衰弱と胃潰瘍により，新聞連載は，五カ月に渡り，中断された。『行人』には，漱石の精神が，極限的に表現されている。したがって，それは，＜恥辱＞の行方の考察において，最も適切な作品であるように思われる。見識のある学者であるが，同時に，鋭敏な感性の持主，主人公長野一郎の性格は，次の様に記述されている。〝神経質〟な〝気むづかし屋〟で，〝癇癪持ち〟，〝最上の権力を塗りつけるようにして育て上げ〟られた，〝自尊心の強い〟〝わがまま者〟。しかし，その反面，〝他人の前へ出ると，また全く人間が変ったように，たいていな事があってもめったに神士の態度をくずさない，円満な好伴侶〟。そんな一

郎にとって，我慢のならない，いわば＜恥辱＞は，「おれが霊も魂もいわゆるスピリットもつかまない女と結婚している事」であった。彼は，弟二郎と妻直の仲に疑惑を抱き，二郎に詰め寄り，〝直の節操〟の試験を強要する。連れ立った二人は，暴風雨により，やむをえず，宿で一夜を明かすことになる。気まずくなった二郎は家を出るが，一郎の猜疑心はつのり，〝神経衰弱〟は昂進する。彼の精神の行方は，――「人間全体の不安を自分一人に集めて，そのまた不安を一刻一分の短時間に煮つめた恐しさ」と，「Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit!（孤独なるものよ，汝はわが住居なり）」，そして，「神は自己だ」「僕は絶対だ」――不安と孤独の極限化，そうして，極限的な自己肯定，自己絶対化[(5)]，現実との対応性を喪失した観念の絶対化，すなわち，＜狂気＞であったのである。

しかし，漱石は，そこからの脱出を志向する。続く『心』において，不安と孤独，さらには＜狂気＞へと昂進する，即自的・無意識的な「自己本位」，〝義〟（他人本位）の背後に隠れた〝我執〟（自己本位），いわば〝無意識の偽善（アンコンシヤス・ヒポクリシイ）〟を，主人公先生とともに，明治の精神に殉死させた。

『心』擱筆後，漱石は，学習院において，「私の個人主義」と題する講演を行なっている。そこで説かれた，彼の個人主義の理念は，次の三カ条に要約される。「第一に自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば，同時に他人の個性も尊重しなければならないという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば，それに附随している義務というものを心得なければならないという事。第三に自己の金力を示そうと願うなら，それに伴う責任を重んじなければならないという事」。言い換えれば，個性・金力・権力の享有には，「人格の支配を受ける必要が起こって来る」ということである。

さらに，漱石は，自己を相対化し，学習院の壇上から，日常生活を営む，明治後期の，現実の他者の中へ復帰した。そして，そこから，対自的・意識的な「自己本位」の理念を，現実的・根源的に，再構築しようとしたのである。すなわち，『道草』である。その末尾において語られる，健三の言葉の，苦々しい響きは，確かに，その道の困難さと，漱石の決意を暗示している。「世の中にかたづくなんてものはほとんどありゃしない。一ぺん起ったことはいつまでも続くのさ。ただいろいろな形に変わるからひとにも自分にもわからなくなるだけのことさ」。そして，その傍では，彼の妻が，「お父さまのおっしゃるこ

とはなんだかちっともわかりゃしないわね」と言いながら，子供の赤い頬に接吻していたのである。

そうして，漱石は，大作『明暗』の執筆途上に斃れた。相対化された彼の視点は，どのような基盤の上に据えられようとしていたのだろうか。あるいは，絶対的な相対化，〝則天去私〟へと向かおうとしていたのであろうか……。

（注）

（1） 内沼幸雄は，「羞恥」（本稿の＜含羞＞に近い）との関係において，夏目漱石を論じている。しかし，漱石を，しばしばその含羞・羞恥を指摘される，太宰治と比較してみれば，共通性とともに，かなりの対照性が明らかになる。思いつくままに，その差異を列挙してみれば，漱石が，長編作家・速筆・論理的・大人の文学・硬派・男性的・常識的・社会人・現実派であるのに対し，太宰は，短編作家・遅筆・感覚的・青春の文学・軟派・女性的・破壊的・家庭人・芸術派である。この点からしても，内沼の議論は，過度に抽象的であるように思われる。

（2） 漱石の＜恥辱＞は，他者が彼を価値者としているにもかかわらず，自己が価値的とする自己に対し，現実の自己が非価値者として意識された（対自的な自己意識において，自己が非価値者として意識された），それ故の＜恥辱＞である。したがって，それは，＜対自的＞な＜恥辱＞である。

（3） 漱石の倫理の原型は，『虞美人草』の武士的・士君子的〝道義〟，『坊ちゃん』の庶民的〝義理人情〟に示されているように，前代的な＜義理・人情＞である。

（4） 漱石は，関西を講演旅行し，旅先で病気を再発させた。その時の講演の一つが，著名な，「現代日本の開化」である。その骨子は，〝現代日本の開化〟（近代化）が，〝外発的〟〝皮相上滑り〟のものであり，それ故，あるいは，将来の日本に対し，〝どうしても悲観したくな〟り，あるいは，〝滑るまいと思って踏張るために神経衰弱にな〟る，というものである。前者は『三四郎』，後者は『行人』において，それぞれ表現されている。

（5） 一郎の場合，この絶対が，自然を媒介に無と一体化する，東洋的・禅的な絶対，〝絶対即相対〟であることにも注目しておかねばなるまい。

五　昭和無頼派の＜含羞＞――太宰治をめぐって

太宰治は，明治末，四二年（1909）に誕生し，敗戦直後，昭和二三年（1948）に情死している。彼の時代背景も，一瞥しておくことにしよう。

大正時代は，閥族打破と憲政擁護を掲げた，一大民衆運動によって，その幕を開けた。そして，第一次世界大戦により，産業と資本主義は，飛躍的に発展する。その経済的躍進と，世界情勢の変化を背景に，自由主義と民主主義が発展，大正デモクラシーの風潮が支配し，政党内閣が実現された。政党政治は，

一時中断されるが，震災後，再び護憲運動が展開され，復活する。文化的・思想的には，教育・ジャーナリズムの発展により，知識が普及し，自由主義と民主主義の発展にともない，個性の尊重や人格の完成，人格主義・教養主義が主張された。

こうして，大正時代は，資本主義経済の完成と，民主主義政治成立の時代，近代市民社会と個人主義の成立の時代，とすることができるであろう。それに照応する文学は，言うまでもなく，武者小路実篤・志賀直哉を代表とする，「白樺派」である。

資本主義と民主主義，市民社会と個人主義の成立は，同時に，その矛盾の顕在化と，その変質の開始でもあった。すでに，第一次大戦前後，独占金融資本—財閥の産業支配は進展し，大戦後の不況を背景に，一方，社会運動が激化するとともに，他方，国家主義が，その胎動を開始していた。文化的にも，映画・大衆文学・ラジオ放送等，大衆文化が，発生・成長している。そして，議会は，大正末十四年（1925），普通選挙法と治安維持法を，同時に成立させていたのである。

昭和の時代は，経済恐慌と大陸出兵によって開始され，最初の普通選挙と社会主義の弾圧が，それに続いた。恐慌とその処理過程を通じ，財閥の支配力が強化され，他方，民衆の経済危機と社会不安は，深刻化した。そして，世界恐慌の波及は，その傾向に拍車をかけ，危機と不安は，一段と深刻化したのである。

こうした状況を背景に，軍部・右翼が台頭し，強硬な大陸政策と，急進的な国家改造に，その打開策を求めた。政党政治は終熄し，社会主義・民主主義は弾圧され，満州侵略により，日本は孤立化して行く。国際危機にともない，軍部の政治支配は強化された。体制は，戦争へと整備され，日中戦争が開始された。戦争の拡大・長期化により，戦時体制は強化され，ドイツ・イタリアとの間に，同盟が締結される。アメリカ・イギリスに対しても，決定的に対立した。日本は，国家統制の下に，産業・政治・教育・思想等，全体制を戦争へと動員し，太平洋戦争へと突入したのである。

そして，敗戦。日本は，アメリカを主体とする，連合国軍占領下，〝戦後〟の歩みを開始した。非軍事化・民主化（「平和と民主主義」）という占領政策に基づき，財閥解体・農地改革，等々の諸改革が遂行され，その集大成とし

て，主権在民・平和主義・人権尊重を三原則とする日本国憲法が，昭和二一年（1946）公布，翌二二年より実施されたのである。

こうして，太宰が，成長し，訣別した，大正から昭和二十年代初頭へという時代の趨勢は，近代市民社会と個人主義が成立し，そして，市民社会は，大衆社会の先駆的形成へと向かい，個人主義は，衰退し，全体主義・国家主義に併呑され，さらに，再び，市民社会と個人主義へ出発した時代，とすることができるであろう。

*

太宰治の際立った性格特性は，過剰な自己意識と，他者に対する過敏性である。「うしろで誰か見ているような気がして，私はいつでも何かの態度をつくっていたのである」（思い出）。彼の背後には，常に〝他者〟が存在し，彼を監視していた。それ故，彼は，それにおびえ，絶えず，自己を意識し，自己を装っていなければならなかったのである。

太宰の文学は，「下降指向の文学」である。彼の「自己否定性」は，〝異常〟と形容されるほど強烈であり，それが，彼の文学と性格を，根本的に規定している。生への欲望と能力の欠乏という彼の資質に基因し，津軽屈指の大地主という生家に対する嫌悪感によって強化された，その性格特性は，劣等感や自信の欠如，余計者・日陰者意識，そして，原罪的な負債感覚として表現されている（「生まれてすいません」二十世紀旗手）。また，それは，社会主義を媒介に，〝滅亡の民〟としての自己意識[(1)]，あるいは，弱者・貧者に対する共感と連帯へと展開され，さらには，破滅志向と融合し，放蕩無頼の生活として行動化されたのである。

しかし，太宰においては，同時に，「自己肯定願望」も顕著である。自己愛と生家への誇りに由来するその傾向は，〝気どり〟や〝体裁〟，自尊心・名誉心として現われ，また，他者に対する〝甘え〟や〝奉仕〟として表現されている。

自己意識の過剰と他者に対する過敏性，自己否定性と自己肯定願望―二つの契機の尖鋭性とその間の動揺が，太宰治とその文学の，根幹をなしている。それ故，彼は，＜含羞＞の人であり，その文学は，＜含羞＞の文学である。

太宰治の，このような性格と文学を，決定的なものにした体験は，帝国大学仏文科入学のため，昭和五年（1930）に上京して以来経験した，一連の体験である。左翼非合法運動への加担，愛人小山初代の上京と，生家からの分家除籍

処分，鎌倉における心中未遂と，自殺幇助罪起訴猶予処分，初代との結婚と，妻の過去の告白，非合法運動からの離脱。他者に対する〝裏切り〟と，それ故の，他者による制裁は，彼の否定的な自己意識と，他者に対する恐怖を，決定的なものにした。そして，同時に，それは，彼の自尊心と愛情希求を刺激し，彼の自己意識を，動揺・尖鋭化させたのである。彼は，≪羞恥≫した。(2)

太宰の処女作品集『晩年』は，遺書としての創作であることが表明され（〝晩年〟），蹉跌と敗北による疎外感・虚無感が，その基調をなし，そこには，悔恨の念が，色濃く滲み出ている（「思い出」）。しかし，それは，自尊の感情によっても，強く染め上げられ，芸術的完成への意識が，全作品を支配している（「完璧の印象。傑作の幻惑」猿面冠者）。それ故，『晩年』は，芸術的完成をめざした遺書，悔恨と自尊の文学である。

〝遺書〟を書いた太宰は，頽廃的・絶望的な時代状況の中，放蕩無頼の生活に耽溺した。そして，盲腸炎により入院，腹膜炎と胸部疾患を併発し，予後，パビナール中毒に陥った。昭和十年（1935）のことである。作品の発表と反響は，彼を困惑させるとともに，彼の文学的野心を覚醒させた。社会秩序と自己自身を，既成の小説と自己の作品を，意識的に破壊する，『虚構の彷徨』の発想・主題と方法は，彼自身と同時に，近代の終焉・自己の喪失・崩壊という，時代をも表現している。そして，聖書・キリスト教への接近は，彼の羞恥の感覚を，罪意識へと収斂させ，(3) 彼の自罰的・自虐的傾向を鮮明化させた。「或る月のない夜に，私ひとりが逃げたのである。とり残された五人の仲間は，すべて命を失った。私は大地主の子である。地主に例外はない。等しく君の仇敵である。裏切者としての厳酷なる刑罰を待っていた」，「有夫の婦人と情死を図ったのである。私二十二歳。女十九歳。師走，酷寒の夜半，女はコオトを着たまま，私もマントを脱がずに入水した。女は死んだ」（狂言の神）。こうして，『虚構の彷徨』は，自虐と野望の文学と言えるであろう。

芥川賞の落選，薬品中毒の進行は，太宰に，借金と醜態を重ねさせた。彼の自己意識，自己否定性と自己肯定願望は，いよいよ尖鋭化し，彼は，両者の間を，大きく動揺した。苦悩と反抗は鮮烈化し，彼の精神と生活は，地獄の様相を呈して来た。そうして，家人と知人は，彼を偽り，精神病院へと入院させた。入院前後の作品，「創生記」・「喝采」・「二十世紀旗手」・「Human Lost」等は，苦悩と反抗，錯乱と絶望の文学と言えよう。

精神病院への強制入院，さらに，入院中の妻の過失は，太宰の，自己愛と自尊心，他者への信頼を粉砕し，彼の，疎外感と人間不信—不安と孤独は，徹底化された。彼は，妻と離別，再び退廃的・自棄的な生活に耽溺し，下宿に自閉した。しかし，ここに，転機が訪れた。「私は，生きなければならぬと思った」のである(東京八景)。それは，何故か。地主・優越者—非価値者として，他者に拒否される存在であるという，彼の否定的な自己意識が，自己と生家の危機によって緩和され，自己意識の動揺が鎮静化され，さらに，健康の回復にともない，〝自重〟の自覚，微かな自己肯定性が発生したからである。「何もない。失うべき，何もない。まことの出発は，ここから？（苦笑)」(思案の敗北)。太宰は，二人目の妻と，平凡な見合により結婚し，堅実な小市民生活を営み，旺盛な創作活動を開始した。生活と行動を，社会的価値に適合させ（〝微笑の能面〟），観念においてのみ，純粋に，自己の価値を貫徹させようとしたのである（〝浪曼的完成，浪曼的秩序〟)。意識的な自己分裂，観念における自己貫徹と現実における自己放棄，〝獄中吟〟，あるいは，大人の知恵。

ともかく，こうして，太宰治の中期は，「安定と開花の時代」とされる。平凡・堅実な生活の形成へと向かった，その初期においては，「満願」・「富獄百景」・「女生徒」・「葉桜と魔笛」・「新樹の言葉」・「愛と美について」等々，あるいは，女性の生理的心理の表現という形式により，家族・肉親の情愛と，忍耐と献身の美を表現した。生活が安定化へ，日本が太平洋戦争へと向かった，その中頃においては，「駈込み訴へ」・「走れメロス」・「新ハムレット」等，西洋の文学，聖書を素材に，愛と罪，信頼と背信，真実と現実の緊張・交錯が表現され，また，「春の盗賊」・「きりぎりす」・「乞食学生」等，生活への懐疑と理想への憧憬，動揺と断念とが表現された。(4) そして，戦争が激化し，敗戦へと向かった，その後期においては，『右大臣実朝』・『津軽』・『新釈諸国噺』・『お伽草紙』等，滅亡の美と，日本の風土と文化への愛惜の念が表現されたのである。

終戦直後に太宰が抱いた，〝新現実〟への希望は，直ちに，絶望に取って代わられた（パンドラの匣→苦悩の年鑑・十五年間)。十五年の苦悩の歳月，愛と罪，信頼と背信，真実と虚構等の人間の根源，それに背を向け素通りし，少しも変わらない，時代と思想，〝便乗主義〟と〝サロンの偽善〟。含羞を知れ，羞恥を知れ。対する彼は，〝権力に反抗して，弱きを助ける〟自由主義者，

〝無頼派(リベルタン)〟。「またもや，八ツ当りしてヤケ酒を飲みたくなって来たのである」。「しからば，どこの誰をまずまっさきに糾弾すべきか。自分である。私である」(十五年間)。戦後日本の現実に対する絶望的な認識は，生家の没落とも相俟って，太宰の反逆思想と破滅志向を，再び昂進させた。

「日本は，もう，何もかもだめなのだわ」，「これからきっと，もっと駄目になると思うわ」。「落ちるところまで落ちて行くんだ」(5)(冬の花火)。太宰は，自己の認識と立場を，明確に表明・宣言した。彼の生活と文学，肉体と精神は，以後，反逆と破滅への道を，一路邁進して行ったのである。「冬の花火」に続く戯曲「春の枯葉」，「男女同権」・「トカトントン」・「メリイクリスマス」等の諸短編，長編小説『斜陽』は，いづれも，頽廃感・虚無感・没落感に覆われ，冷笑的な批評と諷刺によって彩られている。

しかし，反逆と破滅へと向かう，今の彼には，妻子があり，家族に対する，愛情と責任とがあった。それ故，彼の破壊は，逆説的に，家族・家庭，〝炉辺の幸福〟に対する，壮烈・悲愴な破壊として現われたのである。「父はどこかで，義のために遊んでいる。地獄の思いで遊んでいる。いのちを賭けて遊んでいる」(父)。「ヴィヨンの妻」・「おさん」・「如是我聞」・「桜桃」等々に，それは表現されている。

太宰は，自己の生涯の総括として，『人間失格』を執筆した。主人公大庭葉三の手記は，次の言葉で始められている。「恥の多い生涯を送って来ました。自分には人間の生活というものが見当つかないのです」。彼の自画像は，〝自分でもぎょっとしたほど陰惨な〟〝お化けの絵〟。それでも，彼は，〝人間を，どうしても思い切〟ることができず，他者に対し，必死の求愛を試みる。自己を放棄し，他者に追従すること，〝道化〟と〝奉仕〟が，その方法であった。そんな彼は，酒と煙草と娼婦に明け暮れ，左翼運動に参加，そこから逃亡し，有夫の婦人ツネ子と情死事件を引き起こす。子連れの女性シヅ子と同棲し，バーのマダムと関係する。その後，彼は，年若い処女ヨシ子を内縁の妻とし，微かながらも希望を抱き，新婚生活を開始した。しかし，ヨシ子は，その，無垢の信頼と無抵抗故に，ある夜，犯された。葉三は，唯一の希望を破壊され，他者に対する恐怖心を昂進させる。二人の仲は崩壊し，彼は，再び，泥酔と麻薬中毒，醜悪な女性関係の地獄へ陥った。そうして，彼は，友人堀木の〝優しい微笑〟とヒラメの〝しんみりした口調〟に，〝判断も抵抗も忘れ〟，自動車に乗り，

病院の玄関に到着した。サナトリウムであるはずの病院は，脳病院。自分は，罪人どころではなく，狂人，いや，廃人であった。「人間失格」。彼は，生きながら死に，死にながら生きている。

極限的に否定的な自己意識を抱きながら，肯定的な自己を絶望的に願望し，両者の間を動揺する，極限的な＜含羞＞の人間，その苦悩，不安と孤独，それ故の必死の求愛，無垢の信頼と無抵抗，にもかかわらず，それを破壊する他者，そうして，喪失・崩壊して行く自己。これが，太宰によって表現された，自己と他者，時代の現実であったのである。

このことを語り終えた彼は，奇妙に明るい「グッド・バイ」を残し，愛人とともに，極限的な自己否定―＜自殺＞を，ついに実現した。罪の対語，救済を，最後まで見出すことのないままに……。

（注）

（1） 社会主義を，時代の必然と認識し，それにより，自己とその出身階級を，打倒され，滅亡する階級―非価値者として認識する感覚・思考は，有島武郎―芥川龍之介―太宰治と辿ることができる。

太宰や有島が羞恥を感じていたとすれば，貧者・左翼的仲間に対しては，地主・優越者として非価値者である自己を意識して，家族・世間に対しては，彼らの常識的価値に合致しない非価値者である自己を意識して，羞恥を感じた，つまり，相手の価値基準に応じ，別の形の羞恥を感じていたのであろう。

なお，漱石と太宰の，一つの大きな差異は，社会主義を通過しているか否かである。

（2） 太宰の＜含羞＞―≪羞恥≫は，基本的には，他者の自己像（太宰像）が，否定的であることを意識するが故の，否定的自己意識であり，＜含羞＞―≪羞恥≫である。したがって，それは，＜対他的＞な≪羞恥≫である。

（3） 日本における規範は，他者と社会関係からも，美醜・真偽基準からも，明確には自立・分化していない。それ故，他者に対する背信，〝裏切り〟は，規範に対する逸脱―罪として感覚されると同時に，恥・羞恥としても感覚されるのである。

（4） 作田啓一は，太宰のこの頃の作品「恥」を，＜志向のくい違い＞による「羞恥」の典型として論じている。しかし，筆者の視角からすれば，これは，自分が，相手の作家にとって，価値者であると自惚れていた娘が，そうではなかったことを思い知らされ，屈辱を感じ，恥ずかしい思いをしたという，＜恥辱＞―≪羞恥≫の表現であり，まさに，「恥」の話であるように思われる。

（5） この時期，太宰と同様に，坂口安吾も，〝生きよ，堕ちよ〟と，堕落を勧めている（堕落論）。楽観と上昇志向が支配する中で，〝無頼派〟の悲観と下降志向は，現実を，より正しく認識し，方向づけているように思われる。

六　展望

太宰治が入水した，昭和二三年（1948）は，日本が，戦後の混乱を収拾し，安定・復興へと向かう，転換点であった。冷戦の緊迫化により，占領政策の転換は明確化し，アメリカは，労働運動を統制するとともに，日本経済再建の基本原則を提示した。日本の保守勢力は，その指示に基づき，経済の安定・復興を実現し，政権の基礎を固めて行ったのである。

日本の国際復帰，講和・独立をめぐり，国内の政治勢力は，二分された。体制維持を前提に，日米関係と再軍備の強化を志向する〝保守派〟と，それに反対する〝革新派〟。思想的には，革新派が，「平和と民主主義」という市民社会的・個人主義的価値の，理想主義的徹底化により，現状の改革を志向するのに対し，保守派は，それの現実主義的運用により，それを，現状に適合させ，さらには，戦前・戦中の価値体系にも，融合させようとするものであった。

敗戦・戦後の過程を通じ，民衆の状況は，どのようなものであったのだろうか。戦争期における，国家主義的価値の強制と，国家統制に対し，敗戦―民主化の過程は，虚脱―解体・解放として実感された。そして，民衆が直面した現実は，食料の欠乏と経済の混乱，生活の困難であった。こうして，まずは，市民社会の自然状態，個々に分断された個人とその欲望自然主義，自由放任の個人主義が現出したのである。

しかし，食料と生活を確保するためには，その要求と生産の再開とが必要であった。それ故，政治状況の混乱と不安を背景に，盛んな大衆運動・労働運動が展開されたのである。しかし，その後，市民大衆と労働者勢力は，占領軍の抑圧・統制，食料事情の好転，経済の復興・成長，意識の変化等の要因により，徐々に分裂・後退して行った。

こうして，戦後日本社会は，市民社会的・個人主義的原理，「平和と民主主義」を価値として出発し，それは，意味内容を分岐・変容させながらも，価値として保持された。それ故，戦後日本は，大衆の進出という状況下において，再度，市民社会と個人主義が成立した時期，とすることができるであろう。

一九五五年（昭和30）は，日本社会が，次の段階へと向かう出発点であった。まさに，〝戦後は終わった〟のである。経済復興に成功した日本経済は，技術革新による，飛躍的な成長を開始し，その年，保守勢力の統一によって結成された自由民主党は，以後，今日に至るまで，政権を継続維持するのである。

技術革新の進展は，独占資本の高度化・巨大化，国家との結合を進展させ，同時に，大量生産・大量販売を推進，産業構造を変化させ，産業化・都市化を推進する。産業化・都市化の進展は，膨大な新中間層を発生させ，大量消費を可能にして行く。そして，大衆の政治参加により，大衆民主主義が成立する一方，行政機構の拡大により，官僚制が成立し，官僚層が，その勢力を拡大して行く。産業化・都市化の進展は，政治・経済構造ばかりでなく，社会・文化構造をも変化させる。前代的集団は解体され，個人は，原子化されながら，強力・巨大化した組織へと吸収されて行く。マス・メディアと大衆教育の発展は，大衆に文化をもたらし，それと同時に，文化を大衆化して行く。一九五五年以降，日本は，このような大衆社会化の過程を辿り，大衆社会の形成，個人と個人主義の変質を推進して行ったのである。

一九六十年は，市民社会が終焉へと向かい，大衆社会が本格的に形成されて行く，決定的な分岐点であった。安保闘争の昂揚と挫折は，市民社会の理念，「平和と民主主義」の意義と限界を明らかにし，〝高度経済成長〟により，大衆社会は，急速に形成されて行ったのである。

経済の高度成長を基礎に，六十年代後半から七十年代初頭へかけて，大衆社会化は完了し，大衆社会が完成された。七十年代は，その状態が維持され，八十年代は，大衆社会の基盤の上で，市民大衆の，新たな階層分化が進行している。それぞれの状況における社会心理的な表現が，〝中流幻想〟であり，〝少衆・分衆社会〟なのである。

*

先に，大衆社会においては，個人と個人主義が変質することを指摘した。その変質とは，どのようなものなのだろうか。

資本主義と民主主義を基盤とする，市民社会・個人主義の理念を列挙すれば，次の様な事柄があげられるであろう。自由と責任，権利と義務，自主・独立，主体性と自立性，自我と人格，個性・理性・人間性，統一性と全体性，等々。

大衆の政治的・経済的成長を基盤に，大衆が市民社会へ進出し，大衆が市民化すると同時に，市民が大衆化され，市民大衆が成立し，市民社会が大衆社会へと変化して行く過程——これが，大衆社会化である。それは，大衆にとっては，市民からの特権の奪取であり，市民にとっては，大衆による特権の剥奪である。したがって，大衆社会化による，個人と個人主義の変質とは，個人主義

の拡大と衰弱，個人主義の拡散を意味するのである。

それ故，大衆社会における，個人と個人主義の特性は，市民社会における，その理念との対比において，次の様な点を指摘することができるであろう。非主体性と非自立性（他律性・被操作性・他者志向・同調性），没個性・非論理性・非人間性（画一性・感性化・病理性），非統一性と非全体性（分裂性・断片化—経済主義・消費主義）等々である。

さて，私たちは，何故，羞恥しなくなったのだろうか。

それは，第一に，近代・現代社会は，市民社会・大衆社会であり，そこにおいては，個人主義が価値とされるからである。個人主義は，自立的・独立的個人を価値とする。それ故，羞恥の前提である，他者と，他者に対する自己の意識が存在しない。個人は，自己に対してのみ，羞恥するのである。個人が衰弱し，他者志向化する，大衆社会においても，個人主義の枠内にあっては，他者は，手段として存在するに過ぎまい。

第二に，個人主義と市民・大衆社会においては，社会的価値が存在しないからである。羞恥の前提は，価値である。価値的自己との対比における，現実の自己の評価が，羞恥の前提である。ところが，個人主義社会にあっては，個性の尊重故に，諸個人の個別的価値のみが存在するのである。価値の相対化・多元化・個別化は，論理の必然と言えよう。さらに，日本においては，伝統的価値は，敗戦により崩壊し，近代的価値は，定着されぬままに，次の社会へと移行した。それ故，この点においても，羞恥は，自己に対してしか，現象しない。とはいえ，市民社会・大衆社会は，資本主義社会—競争社会である。したがって，経済的基準による，他者との比較が，唯一，羞恥の，一般的な根拠となる。こうして，貧しき者のみが羞恥するのである。

第三に，個人的な羞恥は，抑圧される。生きて，生活して行くためには，社会の一般的価値を受容しなければならない。まして，競争社会においては，個性的価値への固執は，そこからの脱落を意味するに過ぎまい。したがって，個性の尊重は，単なる理想に過ぎないことになる。その代償は，あり余るほど用意されている—〝豊かな社会〟。

こうして，私たちは，今，羞恥が，ほとんど消滅しようとしている時代に生きているのである。

ところで，≪羞恥≫と深く関わり，それぞれの時代を代表する鋭敏な感性，

夏目漱石と太宰治が，いづれも，愛を希求する人間であり，しかも，極限的な不安と孤独，神経衰弱と錯乱に陥り，＜狂気＞と＜自殺＞へと極限化したことは，きわめて興味深い事実である。このことは，個人主義と≪羞恥≫，そして，彼ら二人の，意義と限界を暗示しているのではあるまいか。漱石の意義は，自己肯定性と強者の視座，太宰の意義は，自己否定性と弱者の視座。二人の限界は，それと対立・矛盾する契機と他者を，それとして承認し，統一性・全体性を確保しえなかったこと…？。≪羞恥≫の意義は，自己肯定的契機と自己否定的契機の同時的存在であり，その限界は，動揺である。個人主義の意義は，言うまでもなく，個人の意義の主張である。それでは，個人主義の限界は何か。愛と信頼，そして連帯の〝不可能性〟，と言わざるを得ないのではないだろうか。

現代社会は，個人主義社会であり，そこにおいて，なお，人は，愛を希求している。それ故に，現代社会は，不安と孤独，＜狂気＞と＜自殺＞を潜在させた，病理的な社会として実存しているのではあるまいか。単独の自己肯定・個人主義は，もう良い。それは，生を前提とする限り，必然であるからである。

とすれば，ここで，自己否定の契機を内包する，≪羞恥≫，特に＜含羞＞の，媒介的意義を主張することは，あながち，無意味とばかりは言い切れまい。自己否定性と自己肯定性，両者の包摂・統一を志向しない限り，愛と信頼，そして連帯は，不可能であろうからである。言うまでもなく，その完成には，個人の理念の再構築と，人間の精神・心理を規定・制約している，社会関係そのものの変革が，前提とされなければなるまいが。そうして，それが実現された時，私たちは，≪羞恥≫から，自然に，解放されることだろう。

それ故，≪羞恥≫は，夕陽なのである。

「……私はきょうも，嘘みたいな，まことの話を君に語ろう。

暁雲は，あれは夕焼から生まれた子だと。夕陽なくして，暁雲は生れない。夕焼は，いつも思う。『わたくしは，疲れてしまいました。わたくしを，そんなに見つめては，いけません。わたくしを愛しては，いけません。わたくしは，やがて死ぬる身体です。けれども，明日の朝，東の空から生れ出る太陽を，必ずあなたの友にしてやって下さい。あれは私の，手塩にかけた子供です。まるまる太ったいい子です。』夕焼は，それを諸君に訴えて，そうして悲しく微笑むのである。」（太宰治「善蔵を思う」より）

＜主要参考文献＞

饗庭孝男『太宰治論』(1976) 講談社
荒木博之『日本人の心情論理』(1976) 講談社
磯野富士子「家と自我意識」(1960)『近代日本思想史講座Ⅵ自我と環境』筑摩書房所収
井上忠司『「世間体」の構造』(1977) 日本放送出版協会
　――『まなざしの人間関係』(1982) 講談社
内沼幸雄『対人恐怖の人間学』(1977) 弘文堂
　――『羞恥の構造』(1983) 紀伊国屋書店
江藤淳『決定版夏目漱石』(1974) 新潮社
NHK放送世論調査所編『図説　戦後世論史』(1975) 日本放送出版協会
奥野健男『太宰治論』(1956) 近代生活社
小此木啓吾『自己愛人間』(1981) 朝日出版社
梶木剛『夏目漱石論』(1976) 勁草書房
向坂寛『恥の構造』(1982) 講談社
作田啓一『恥の文化再考』(1967) 筑摩書房
　――『価値の社会学』(1972) 岩波書店
桜井庄太郎『名誉と恥辱』(1971) 法政大学出版局
サルトル・J―P (松浪信三郎訳)『存在と無』(1943) 人文書院
シェーラー・M (浜田善文訳)「羞恥と羞恥心」(1957)『シェーラー著作集15』白水社所収
太宰治―諸作品
土居健郎『「甘え」の構造』(1971) 弘文堂
夏目漱石―諸作品
西尾幹二『ヨーロッパの個人主義』(1969) 講談社
浜口恵俊『「日本らしさ」の再発見』(1977) 日本経済新聞社
福井康之『まなざしの心理学』(1984) 創元社
ベネディクト・R (長谷川松治訳)『定訳菊と刀』(1946) 社会思想社
『民族学研究―特集ルース・ベネディクト『菊と刀』の与えるもの』第十四巻第四号 (1950)
森三樹三郎『「名」と「恥」の文化』(1971) 講談社
森口兼二「自尊心の発達諸段階における罪と恥」(1963)『京都大学教育学部紀要』Ⅸ所収
森田正馬『赤面恐怖の治し方』(1953) 白楊社
柳田国男「罪の文化と恥の文化」(1950)『定本柳田国男集第三十巻』筑摩書房所収

(筆者の住所：〒190　立川市曙町1―3―13)